Between the Acts における music と sound

中谷紘子

1. はじめに

Virginia Woolf は *Between the Acts*(1941)の校了を待たずに自ら命を絶ったが、作品に対する手応えを“I am a little triumphant about the book. I think its an interesting attempt in a new method. I think its more quintessential than the others”(*TDVW* 340)と記している。著者の言う“a new method”とは、これまでの小説作品のような個の内面深くに入り込んで意識を中心に描く手法とは異なり、個の集合としての外部世界を描いたことではないだろうか。このことを叶えるために、内から出るものではなく、外部世界の音が作品造形の上で効果的に使用されているように思う。作品は野外劇の進行と観衆の言動が入り乱れ、まさに“Juggling of illusion and reality”(Fleishman 247)となっているが、登場人物の会話以外にテクスト内に読者が音として認められるものの多様性や頻度にも、illusion と reality に関する著者の意匠を伺うことができる。つまり作品内の音の使用には、大きく分けて「音楽(music)」とそれ以外の「音(sound)」の区別があり、この 2 種類の音の使用は *Between the Acts* という作品に関わる 2 人の芸術家、Virginia Woolf と作中の劇作家 La Trobe の芸術のヴィジョンと直結すると捉えられるのだ。そこで本論では、Woolf の新しい手法とは、音楽や音によって作品を造形しようとしたことだと捉え、この造形手法がどのように Woolf の芸術的ヴィジョンにつながっているかを再読してみようと思う。

2. La Trobe の野外劇と音楽(music)

始めに La Trobe の劇において欠かせないものになっている「音楽」について考えてみる。La Trobe が脚本上使用する音楽には、観衆を自らの野外劇という芸術作品と結びつけておこうとする意図が見られる。蓄音機から流れる音楽によって劇の始まりが知らせれ、休憩後のざわつきから再び劇世界へと誘うのも、音楽である。“music!”や“tunes!”と La Trobe が半ば躍起になって叫ぶ背景には、音楽は感情を継続させるものだという考えがあり、観衆の感情の継続がその芸術に欠かせないとするからである。ここでは言葉の意味や内容の伝達よりも、感情に作用する音楽の力が優先されている。

野外劇の元で観衆の感情の継続を求めるのには、La Trobe の作る芸術が一種の“the communal art”あるいは“the art of the whole community”であるからだと Melba Cuddy-Keane が述べているように、彼女の芸術は人々の意識の集合体を形成する芸術の形である。第一幕の終わりに“Dispersed are we”という音楽を口ずさみながら人々がお茶や軽食を求めて納屋へ群れて行く時、そこへ加わらない Giles と Cobbet を観察し、La Trobe は演出の“failure”を感じている。このことから、La Trobe が自らの劇によって、人々のあいだに、感情の共有による、ある種の共同体意識の形成を目指していたことが読み取れる。それを可能にするのが音楽なのだ。

しかしながら、La Trobe の芸術は音楽の力に頼っているため非常に脆く、彼女は劇がうまくいかなくなると、“Illusion had failed. ‘This is death’ ”(*BTA* 84)などと言って嘆く。彼女の創造する芸術は illusion であり、reality（現実）と対峙し、現実によって崩れるのだ。La Trobe は最後の幕の演出において、人々の現在をそのまま劇に取り込もうと、舞台上の全ての演出を音楽も含めて 10 分間止め、その後鏡を持ち込み現実を写し出した。この演出無き「演出」は観衆の心を乱し、不安を引き出す結果となった。“Reality too strong”(*BTA* 107)だったのだ。この状況を救ったのは自然の雨(“Tears, tears, tears”)であり、感情を含んだ詩的な効果を与えて人々を再び落ち着かせている。自然界が作り出す音もまた、音楽として捉えられるのだ。終演後、ひとり隠れるように居酒屋で酒を飲む La Trobe は“Words without meaning— wonderful words”(*BTA* 125)に浸る。彼女の芸術は、「意味のない言葉たち」であり、どこまでも音楽性を免れることはない、illusion であると考えられる。

3. 音(sound)について

テクストに何度も繰り返し出てくる Chuff, chuff, chuff という音は、機械の不調音であるが、感情を継続させる「音楽」とは対極にとらえられている。このような物音を「音(sound)」としておきたい。この音そのものの性質は、“accurate”であり、“insistently”である。正確に、均等に時を刻む音を連想させるこの人工的な音は、La Trobe の illusion が溶けるカウントダウンを表す時計の音のように機能し(*BTA* 91)、観衆を繋ぎ止める感情の継続が限界に近づき、現実の時間が押し寄せることを表している(*BTA* 92)。この音が続くと、人々は単に「囚われている」と感じ、居心地の悪さに神経が張り詰めた状態になる(*BTA* 105)。蓄音機の音以外に飛行機の音や車の音も邪魔な音(interruption)として捉えられていて、野外劇の欠点と認識されている。つまり、野外劇において Woolf は感情に属する「音楽」を La Trobe の illusion を継続させる音とし、現実の「音」はそれに反するネガティブな性質を持つも

のとして使い分けている。「音楽」は旋律を持ついわゆる歌やコーラスに加えて動物や自然界の作り出すものが含まれ、「音」は人工的で、リズムがあっても人々の感情に関わらず均等に時を分割するものである。

4. Woolf の芸術

「この小説はある午後に起こった出来事の記録であり、まるで、野外劇とそれを鑑賞している人々および間に合わせの舞台の外にある自然環境を記録するために一台のカメラを設置したようだ」と Elicia Clement が評している通り、Woolf はこの小説で、記録(archive)にすぎない小説の限界を超え、書いたものであるにも関わらず、live performance のような形のものを提示しようとしているようだ。そこで重要になるのが、La Trobe の芸術の要となる「音楽」ではなく、現実の生活につながる「音」である。旋律のない音、野外劇では妨害音として捉えられていた人工的な音、機械音は実際の音なので、読者の「耳」に入ることができるのである。それは同時に、物語内の現実にも響いていた音であるため、読者は小説空間を同時に体験することができる。時には登場人物の会話と同列に「音」を記述し、時には言葉自体にパフォーマンス性を与え[1]、著者の選択的語りよりも、performance art として全てを見せようとしているように思われる。Woolf は、特に *Jacob's Room* から *The Waves* に至るまで、人間の内面意識に深く入っていき、物理的な外面生活と意識下とのあいだのやりとりを、内から描くことに注力していた。しかし最後の作品では、一人の内面に奥深く入っていく代わりに全体性のほうを描き、彼女の芸術とは、日常の外面的なものと、一種のトランス状態にあるような無時間の illusion も合わせた全てであると示したように思える。文字で書かれた芸術でありながら、音と音楽を使ってそのヴィジョンが示されているのだ。

5. 結論

英国で野外劇が盛んに行われるようになったのは、19 世紀末のようである。近代化する世界への人々の反応であり、歴史を共有し、パフォーマンスしたいという想いから生まれたという。野外劇の作り手がローカルな人々であり、プロではなかったことからコミュニティ意識の形成に役立っていたようである。当時の人々のこうした意識が少なからず La Trobe の芸術に投影されているように思う。しかし *Between the Acts* で描かれているのは、芸術の内容、つまり歴史ではなく、感情という精神をもとにコミュニティ意識をつくるという、野外劇を通した芸術の創作プロセスである。ヴィクトリア朝時代の劇までは La Trobe 主導の illusion は完全に成功とは言えずとも、音楽によって集合的意識の創出ができていたが、現代劇となると、これまで同様の illusion は崩れてしまっている。現代において、既存の芸術プロセスとは異なるものを提示しようとしたようにも思える。Woolf は“A Sketch of the Past”に次のように記している。“Hamlet or a Beethoven quartet is the truth about this vast mass that we call the world. But there is no Shakespeare, there is no Beethoven; certainly and emphatically there is no God; we are the words; we are the music; we are the thing itself.” (72) ここに La Trobe の芸術の失敗の原因が見られ、最後に Woolf は、芸術の受け手を主役にした芸術を表そうとしたように思われる。

注

1. “Words this afternoon ceased to lie flat in the sentence” (38)など。

参考文献

Clements, Elicia. *Virginia Woolf; Music, Sound, Language*. University of Toronto Press, 2019.

Cuddy-Keane, Melba. “The Politics of Comic Modes in Virginia Woolf’s *Between the Acts*.” *PMLA.* Vol.105, No.2, Mar. 1990, pp. 273-285.

Fleishman, Avrom. The English Historical Novel: Walter Scott to Virginia Woolf. Hopkins University Press, 1971.

Naremore, James. *The World Without a Self; Virginia Woolf and the Novel*. Yale University Press, 1973.

Thompson, Trina. “Sounding the Past—The Music in *Between the Acts*.” *Virginia Woolf and Music.* Ed. Adriana Varga. Indiana University Press, 2014, pp. 205-226.

Woolf, Virginia. *Between the Acts*. Penguin Books, 1992.

---. *Moments of Being*. Edited by Jeanne Schulkind, A Harvest Book Harcourt, Inc., 1985.

---. *Mrs. Dalloway*. Penguin Books,1992.

---. *The Diary of Virginia Woolf*. Vol. 5:1936-41. Ed. Anne Oliver Bell. The Hogarth Press, 1980.

太田素子著『ヴァージニア・ウルフの「パーティ空間」』, 英宝社, 2019.